

「下部尿路障害に対する鍼治療の臨床効果と基礎研究 —過活動膀胱を中心として—」

明治国際医療大学鍼灸学部 教授 北小路 博史

【はじめに】

Abrams は、下部尿路症状(lower urinary tract symptoms :LUTS)を、蓄尿症状(storage symptoms)と排出症状(voiding symptoms)に分けた。蓄尿症状の主な症状は、頻尿、夜間頻尿、尿意切迫、尿失禁等である。排出症状の主な症状は、排尿困難(遷延性排尿、再延性排尿等)、尿閉等がある。

過活動膀胱 Overactive Bladder (OAB)は、「切迫性尿失禁の有無にかかわらず、通常、頻尿および夜間頻尿を伴う尿意切迫」を特徴とする症候群である。

日本における OAB の疫学調査によると、日本全体では約 840 万人の患者がいることが推定されている。今回、過活動膀胱に対する鍼の臨床効果と基礎研究に関して報告する。

【中髎穴(BL33)鍼治療の臨床効果】

過活動膀胱と診断された 20 例(男性 16 例、女性 4 例、平均年齢 73 歳)での検討では、膀胱の無抑制収縮は、鍼治療後 7 例(33%)消失した。初発尿意は、鍼治療に比べ全鍼治療終了後(以下鍼治療後)有意($p < 0.05$)な増加を示した。最大膀胱容量(最大尿意)も $113 \pm 62\text{ml}$ から $185 \pm 94\text{ml}$ ($p < 0.01$)統計学的に有意な増加を示した。臨床症状は、鍼治療前に切迫性尿失禁を訴えた 20 例中 14 例(70%)において失禁が消失もしくは改善がみられ、6 例(30%)は不変であった。

【疾患モデルによる基礎研究】

疾患モデルの脳梗塞モデル、尿路閉塞モデルおよび酢酸誘発頻尿モデルを基に鍼刺激の膀胱機能への影響について検討した。脳梗塞モデルと尿路閉塞モデルの

「排尿に至らない膀胱収縮 (Non-voiding contractions; NVCs)」は鍼刺激により減少し、酢酸誘発頻尿モデルの排尿間隔は鍼刺激により延長 (膀胱容量の増大) が観察された。